

## II 瀬戸内海の交易と海の道

### 1 港町のにぎわい

港町にはたくさんの物資や情報が各地から集まります。特に大きな港である尾道と瀬戸田には、周辺地域からだけでなく、遠く九州や近畿地方、あるいは東北地方からも船が寄港していました。そうした港町の光景は、室町時代の武将、今川貞世（了俊）の紀行文『みちゆきぶり』にみることができます。

こうした港町の繁栄ぶりは、地下に埋蔵されている尾道遺跡から出土した様々な遺物からもみてとることができます。ここでは、出土遺物からみた、当時の港町の繁栄ぶりや人々の生活の様子をご紹介します。

尾道遺跡からは、数万点の様々な遺物が出土しています。それらのほとんどは、港町に生活していた人々が使用していた品であると考えられますが、そのほとんどは、別の場所で作られ、港に搬入された物です。遠くは中国や朝鮮半島で作られた物、また、日本でも東海地方や近畿地方、九州から運ばれてきた品々が多数見つかっています。

出土遺物は大きく分けると、土器、土製品、木製品、石製品、金属製品、瓦の種類があります。その種類ごとにご紹介していきます。

#### ① 土器

##### 土師質土器

素焼きの土器で「かわらけ」とも呼ばれます。その形状から皿・碗・坏・鍋・釜の種類に区分され、さらに大きさや細部の形状の違いにより、分けることができます。そうした細かな違いは、その土器が作られた時期の違いであるとみることができます。それは、遺跡から出土する遺物はその出土した土層が下であれば古く、上にいくほど新しくなる、つまり、土は上から少しずつ堆積していくという原則があります。よって、遺跡から出土した際に、その土器が出土した土層が上か下かによって、その土器が埋まった時期が古いか新しいかが分かります。



土師質土器



土師質土器鍋

このような土師質の皿・碗などは、尾道遺跡から大量に出土しており、出土遺物の6～7割を占めます。これは、この土器が日常的に使用されていたことを物語っており、食器として、港町に住む人々が使用していたと考えられます。また、大量生産品であることから、尾道の近隣の地域で作られていたことが窺えます。

### 瓦質土器

土師質土器が素焼きの土器で、赤みがかった色をしているのに対し、瓦質土器は、瓦のような灰黒色をしています。主に鍋やすり鉢などの大型の土器がみられます。これらの土器は尾道遺跡から大量に発見されており、人々の生活必需品として使用されていたと考えられます。



瓦質土器すり鉢

### 国産陶器

中世には、日本各地で陶器の窯が築かれ、様々な陶器が焼かれます。そうした陶器は、物資の集積地である港町から多数発見されます。尾道遺跡からも、瀬戸焼、常滑焼、備前焼、東播系須恵器など全国各地の陶器が出土しています。

### 瀬戸焼

小皿、卸皿、天目茶碗、四耳壺が出土しています。瀬戸焼は、現在の愛知県瀬戸市周辺で作られた陶器で、緑がかった釉薬に特徴があります。



四耳壺



卸皿



天目茶碗

### 常滑焼

壺とこね鉢、すり鉢、大甕が出土しています。常滑焼は現在の愛知県常滑市周辺で作られた陶器で、灰色や褐色がかった釉薬に特徴があり、比較的大型の陶器がみられます。



こね鉢



壺



大甕

### 備前焼

すり鉢、壺と大甕、小型壺が出土しています。備前焼は、現在の岡山県備前市で焼かれていた陶器で、褐色の素朴な釉薬とその種類が生活必需品であることに特徴があります。尾道遺跡では、特にすり鉢が多数出土しており、人々の生活に欠かせないものであったことが分かります。また、I章でご紹介した備前焼の大甕が8個並んで出土するなど、商売道具としても使用されていたと考えられます。



壺



すり鉢



すり鉢



鉢

### 東播系須恵器

鉢、すり鉢が出土しています。東播とは、現在の兵庫県東部地域を指し、その周辺で作られた土器を東播系須恵器と呼んでいます。灰色がかった古墳時代の須恵器のような土器であり、尾道遺跡からも出土しています。



### 中国製陶磁器

尾道遺跡からは、日本以外の地域で作られた陶磁器も多数出土しています。特に中国宋・元時代の龍泉窯で焼かれた青磁や白磁は、当時の中国の重要な輸出品のひとつであり、日本でも珍重され、多くの中世遺跡から見つかっています。物資の集積地である港町には、青磁や白磁を交易品としてだけでなく、生活道具としても使用していたことでしょう。

また、中国製陶磁器は、中世の権力者たちにとって、ステータスシンボルでもあり、特に砧青磁などは、代々受け継がれ、現在は重要文化財となっているものもあります。

尾道遺跡から出土した中国製陶磁器には、青磁碗・皿、白磁碗・皿、青白磁合子、青花碗・皿、天目茶碗、茶入があります。それぞれの種類ごとにご紹介していきます。

### 青磁碗・皿

尾道遺跡から出土している中国製陶磁器の中で、最も多く出土しています。青磁碗は、表面の文様や高台（土器の下部の台部分）の形状により、作られた時期が分かります。青磁碗の表面には、蓮弁文と呼ばれる蓮の花びらのような文様がみられ、みこみ（内部底面）に印花文と呼ばれる植物の文様が彫られています。こうした文様などから分かる青磁の年代は、尾道遺跡では14世紀から15世紀中頃にかけてのものが多くみられます。青磁皿の底に墨で「十」と書かれたものも見つかっています。





### 白磁碗・皿

尾道遺跡から出土した白磁碗は、それほどありませんが、特に重要なものとして、第1次調査で出土した枢府窯白磁碗があります。これは、発掘調査で出土した完品の枢府窯白磁碗として、日本国内で唯一の土器であり、内面にみられる鳥の文様など、その美しさは素晴らしいものがあります。こうした土器は国内でも大規模な中世遺跡から出土しており、限られた人々が入手できる、貴重な品であるということが出来ます。港町尾道の有力者が所有していたのでしょうか。



### 天目茶碗・茶入

中国で作られた天目茶碗や茶入が出土しています。これらは、主に茶器として使用されたと考えられます。港町の文化を感じることができる一品です。



## 朝鮮半島製陶磁器

中国製陶磁器に比べると数は少ないですが、朝鮮半島で作られた陶磁器も出土しています。朝鮮製は、象嵌と呼ばれる技術で描かれた文様や、三島手と呼ばれる独特の文様に特徴があります。



## ② 木製品

### 木簡

木に墨で字が書かれた物を木簡と呼びます。古代・中世では、紙は貴重品であり、一部の人々が使用していたのですが、多くは木に墨で字を書いていました。尾道遺跡でも木簡が出土していますが、こうした木製品が当時の状態のまま残っていることは、珍しいことです。福山市草戸千軒町遺跡でも多数の木製品が出土していますが、地中深く埋まり、かつ地中の水分が多く、空気に触れなかったために良好な状態で残っているのです。

木簡は書かれている内容により、種類が分かりますが、尾道遺跡では、荷札木簡や呪符木簡が出土しています。荷札木簡は、その名前のとおり、荷物などにつける荷札として使用された木簡です。下の写真は、「乃米まんところより」（のうまいまんところより）と書かれており、米（年貢）をまんところ（政所）に納めるといった内容と考えられます。政所は当時の役所の様な場所であり、政所が尾道にあった可能性を示唆する貴重な資料です。他にも「寺大豆二斗十口」と書かれた木簡もあり、寺院との関連性をうかがわせます。



また、呪符木簡は、いわゆる「まじない」に使われた木簡で、「急々如律□天□八万四千神□」と墨書された木簡には、火や水といった文字も書かれています。こうした木簡をどのように使用していたのかはよく分かっていませんが、疫病よけ等の中世のまじないの一種であると考えられます。

## 漆碗・皿・折敷

下の写真は、発掘調査で出土したばかりの漆碗です。地中の水分が多いためよく残っており、下地の黒漆に朱漆の文様が鮮やかに浮かび上がっています。鳥や植物の文様が見事に描かれ、非常に高度な技術により、作られた漆碗です。また、その隣の写真は、黒漆に朱漆で三ツ巴の文様が描かれた漆皿です。



他にも、カエデや菊などの植物や、鶴、亀甲文が描かれた漆碗・皿が多数出土しています。こうした漆製品は、他の地域から持ち込まれた物であり、交易品であるとともに、生活用具としても使用されていました。

このような木製品は、上の写真のような発掘された当時のままで保存することは難しく、科学的な保存処理を行う必要があります。現在、尾道市では、美しい状態を保てるように保存処理を行い、展示などに活用しています。



漆碗



漆皿





### 杓子状木製品・箸状木製品・曲物・下駄

人々の生活に必要な道具も多数出土しています。杓子状木製品や箸状木製品はその名前のおお、杓子や箸として使用されていたと考えられ、また、曲物は現在でも伝統工芸品として製作されています。こうした道具類は中世で既に製作され、使用されており、現在までその形状や使用方法は変わらず受け継がれてきています。



杓子状木製品



箸状木製品



曲物



下駄

### 羽子板状木製品・鋤先

その他に、羽子板が出土しています。現在でも行われる羽子板は、中世には魔よけの意味も込められており、遊びであるとともに「まじない」でもありました。中世から長く受け継がれる伝統的な遊び道具であるといえます。

また、農耕具である鋤は、鉄製品もありますが、一般に普及していたのは、木製の鋤が多いようです。港町周辺にも田畑が広がっていた様子が見えます。



羽子板状木製品



鋤先



### ③ 土製品・石製品・金属製品など

土器や木製品の他に土製品・石製品、金属製品、さらに鹿角製品などがあります。下の写真は滑石という加工しやすい石で作られた鍋です。表面には、加工時の工具の痕が明瞭に残っています。この滑石は、現在の長崎県西彼杵半島で産出された石で、この滑石製石鍋は西日本の港町の遺跡から多く出土しています。

また、硯も多数見つっています。硯は粘板岩や頁岩といった加工しやすい石で作られたものが多く見つっています。



滑石製石鍋



硯

右の写真は、ファイゴの羽口です。これは、鉄などの鍛冶に使用します。鍛冶で火を強くする際の風を送る装置で、尾道遺跡からは多数出土しています。港町で活動する鍛冶屋が多かったのでしょうか。現在でも残る鍛冶屋町という地名は、江戸時代に鍛冶屋が存在していた明らかな証拠ですが、中世においても既にそのような職人が多数住んでいたことを物語っています。今後、発掘調査で鍛冶遺構が発見されれば、尾道の職人たちの活動の内容が分かるかもしれません。

また、金属を研ぐ砥石も多数出土しています。鍛冶職人が使用したものや、港に住んでいた人々の生活で使用したことが考えられます。

この他に土製の錘が多数出土しています。錘はその形によって、釣り竿用と網用に分けられますが、特に網用の錘が多数出土しています。港町に住む漁師が使用していたのでしょうか。

また、用途不明の円形土製品が多数出土しています。通常、メンコと呼んでいますが、どのように使用されたのかはよく分かっていません。その素材として、土器や瓦が再利用されています。



ファイゴの羽口



砥石

中世において、鉄や銅といった金属製品はとても貴重品でした。尾道遺跡から出土している金属製品には、鉄斧、鉄釘、銅製筭、銅銭、銅鏡、銅製小碗などがあります。

尾道遺跡からは、銅鏡が2枚出土しています。どちらも井戸跡からの出土で、そのうちの1枚には写真のように呪文が墨書された木札が重なっていました。これは、「まじない」に使用されたものと考えられ、人々の生活に欠かせない井戸に納められたものと推定されます。この「まじない」の一例として、同じように鏡と木札、銅銭が埋納されていた三次市山崎遺跡の出土遺物があります。



銅鏡と木札



銅銭（木梨遺跡出土）

この銅鏡の他にも「まじない」の例として、土師質土器碗を二つ重ねて、その中に銅銭を入れたものが見つっています。このような「まじない」にどのような意味があるのかまだ分かっていませんが、中世の精神世界を探る貴重な資料となると考えられます。

また、右の写真のような、五輪塔形木製品も出土していることから、港町に住む人々の信仰の様子が分かります。



五輪塔形木製品

右の写真は、銅製の筭（こうがい）です。筭は頭に飾る装飾品の一つで、銅製だけでなく、角製の筭も出土しています。



鹿角製筭



銅製筭

## 2 交易と海の道

瀬戸内海は、海の道（航路）により、各地域の港町とつながり、波も穏やかであることから、陸路よりも迅速にかつ大量にまた安全に物資を運ぶことができるという、交易にとって格好の条件を備えています。特に外国との交易が盛んになった平安時代以降、交易船の中継地として、また、物資の集積地として港町は飛躍的に発展をとげます。

尾道も日本各地への大型船の停泊地であり、瀬戸内海周辺からの物資の集積地となり、瀬戸内海の中央に位置する立地もあって、商業や海運業の中心地となったのです。そこに集まる物資は、瀬戸焼・常滑焼・備前焼といった日本各地の陶器、九州産の滑石製石鍋、中国や朝鮮半島製の陶磁器など、多様な品々がみられます。また、米や塩、鉄といった周辺地域からもたらされた品々が日本各地へ運ばれました。

そうした物資により、港を取り仕切る商人たちは莫大な利益をあげ、港町が拡大し、多くの寄進により、寺院の建物や石造物などが建てられていったのです。



港には、様々な商品を扱う商人、石細工や木製品などを作る手工業者、海上交通や荷揚げなどを取り仕切る海運業者がいて、彼らが港町を取り仕切っていたと考えられます。この海運業者たちは、海の道を管理する海賊衆とも連携し、戦争時には、水軍に関わる者として、平常時には海の道により、各地との交易を行う者であったのでしょう。この海賊衆や海運業者については、次の章で詳しく触れることとします。

また、港町尾道には、多数の手工業者たちが存在したことが資料により分かっています。刀鍛冶や石工はその代表ともいえます。刀鍛冶は尾道住の其阿弥が代々刀鍛冶として、刀を製作し、他にも多くの鍛冶職人がいたと考えられます。江戸時代やその後も続いた鍛冶業は、地名に鍛冶屋町と残るなど、現在でもその痕跡をみることができます。

石細工は尾道で中世から近世にかけて、飛躍的に発展しています。尾道に住んでいた石工もたくさんいて、日本各地にその名前が彫られた石造物をみることができます。中世の尾道には、多数の石造物が作られ、貴重な歴史遺産として、現在に残っています。石造物と石工については、IV章で詳しく触れたいと思います。